

結婚なんて、  
やめなさい

hirofumi

## はじめに

---

昔の矢野顕子さんの歌に、こういうのがあります。

どうしてうまくいかないの  
今はなんのとりえないけど  
わたしの小さな陽だまりに  
だれか早く気付いてちょうだい  
わたしは本当は  
すなおでやさしい人なの

僕がこの歌に出会った時期が、いわゆる、10代の多感な頃だったこともあり。  
常に受け身で劣等感に苛まれているような？当時のワタクシ、そして当時の大多数の若者にと  
って、この曲はある種のバイブルであり、代弁だったように思います。  
勘違いの恋も、よくしていましたしね（笑）

以前やっていたドラマ「ハケン占い師アタル」のセリフに、こういうのがあります。

幸せなんて、周りと比べても意味がないの。人のことをうらやんでばかりいると、自分の運命を  
呪いたくなるだけ。  
世の中、不公平なのが当たり前だから。  
世界中のみんなが、平等に不公平なの。  
だからテロや病気や人災で亡くなる人がいっぱいいる。  
私たちはこの世界で、この不公平な世界で生きていくしかないの。  
自分の運命を呪ったって意味ないの。  
生まれ変わることもなんて出来ないんだから。  
（なんか、占いやる人のセリフじゃないんですけどね）

僕の今の実感としては。  
時代がようやく、現実というものを、まだまだうっすらとだけれど、より直視する段階に入っ  
てきたのかなあ、ということ。  
そして、現実というものは、たいてい、いつも残酷なもの。  
そうですね、たいていが、うまくいかなくて終わってしまうことがほとんどだと思います。

それでも。

所詮、人生は、せっかく生まれてきたのなら、あがきたいのならあがく。よりよい生き方を望むなら、それに向かって努力するしかないんでしょうね。

いつもうまくいかない、自分の小さな陽だまりを抱えながら。

ところで、タイトルを「結婚なんて、やめなさい」としているわけですが。

だいたい、婚活とか少子化とか核家族とか、あと勝ち組とか（笑）

よく「結婚」にまつわる、キーワードがありますよね、それは、時代によっても変わり、またその時々、結婚にまつわる独特の問題が浮き彫りになったり。

とかく最近、以前にも増して、政府が担当大臣をこさえたりして、いらぬ介入をしているのですが。

それに対して国民の皆々様方は、相変わらずの思考停止を決め込んで、未だ、結婚しない人のことを偏見または奇異の目で見ると、または変人扱い（？）

そして、当の「おひとりさま」が、いざ知らず後ろめたさを抱えて生きている、というのであれば、本末転倒、とても悲しいことではないかと。

えっと。ワタクシ個人に関しましては、過去に子連れ同棲の経験がちょいありで、現在独り身です。

要するに、過去の経験を踏まえて？あらためて独り身の解放感？を噛みしめながら、現在、幸せに暮らしております。

まあ、独り身の強がりかもしれません（苦笑）

まあ、読む方々がこちらのことをどう思ってもらうかについては、別にどうでもいいんですが。

結婚なんて、やめなさい、ということではあっても、とにかく、結婚をする・しない（または出来ない、別れられない）という以前に、そもそもの「結婚」という概念（価値観というか）を、今一度考え直したいと、もし思われているのであれば、もしかしたら此処は。

ご自身の中に、いままで味わったことのない？確固たる基盤を構築して、その先にある、より納得しうる（であろう）高みへと繰り出してあげられる、そんな想いで書かれた場所になっている、のかもしれませんが、此処は。

すごいですね、どういう立場でモノを云おうとしているのでしょうか、ワタクシは(^\_^;)

ということで、僕の方からもっともっと細やかに？述べたい事柄については、それぞれの項目にて、じっくり、のちほど。

## まずは経済的な観点から

---

あの平成が、この間終わりましたね。

平成は、俗に「失われた20年」「経済停滞の30年」と云われてきました。

戦後から平成～現在に至るまでの国会での審議・答弁は、あのリクルート事件(よく、政治家が出てくるテレビドラマで、『それは秘書が独断でやったことだ!』という迷セリフのモトになった事件が、アレです)を象徴するような、数々の歴史的「茶番」が展開されてきておりますが。

安倍政権になってから、いわゆる「アベノミクス」というやつで、現在、日本は好景気に張り咲いたというような雰囲気醸し出そうとして失敗しております(笑)

ここで、少し、僕の方から、あの平成期の30年、経済的に日本がどのような状況になってしまったのかをザックリ説明してみたいと思います。

まず、平成元年は、いわゆるバブルに沸いた時代ですね。

厳密にいうと、平成に入る直前、戦後復興から高度経済成長によって好景気を築いた日本をアメリカが警戒しだし、貿易赤字の解消、固定為替の撤廃等、それらによっていままで300円台だったドルが今ではなんと100円台(プラザ合意)にまで下がるという。

こんな感じで説明しても、今の状況にピンとこない方は、こう云えばわかるかな。

要は300円の「価値」が100円になったということ。

現在、月に20万の給料をもらっている人は、本来なら同じ仕事で40～50万もらっていなければおかしい、と云っても過言ではない、ということです。

昭和期は、自動車の組立工が家を建て、親子三代で暮らせたのが、今は同じ仕事で、到底それは叶わなく。

これは、超絶な結論として語るならば、今の日本の政治が悪いという以前に、アメリカのせいなんです。

プラザ合意で、最初は国内にカネがダブつき、とんでもなく浮かれたバブル状態に置かれたのち、とんでもない金融の引き締めによって国内に大混乱が巻き起こり、未だその余波は続いているという。

例せば、アメリカが日本にヤクを打った、みたいな感じです。いやホント。

さて。

本来なら40～50万もらっていなければおかしい自分の給料、こんなに薄給にされ、結婚なんてするモチベーションなんて上がりませんよねえ。

だから、今の政府がやっている政策は、婚活・少子化にまつわる事柄だけでもめちゃくちゃピン트가ずれているということ、これでよく解るのではないのでしょうか。

(まあ、お役人が世の中をよくするというのは、いつの時代も幻想なんです)

あと、まったくの余談なんですがね。

近年、日本で花粉症になる人が多くなったのは、せっかく植林した杉などの針葉樹林が外圧で売れなくなってしまったため、そのまま間引かず、ほったらかしたことで、毎年、その花粉が放出されるようになってしまったことが原因です。

バブル崩壊の余波ここにも、といった感じです。

## 女性の意識の変化について

---

身内のことで恐縮ですが。

ウチのおふくろは、いわゆる「焼け跡世代」で、割と古い女性の考え方をする典型の人です。

「ヨイトマケの唄」ほど極端？ではないけれど、そこそこオヤジに従い、あまり口答えせず。男の三歩後ろに下がって歩く、という様な。

まあ、それが良いかどうかは置いておいて、要は、そういうことをやってのける女性というものは、ある意味「大人」でなければ出来ない、ということです。

それが、またあのバブル期を引き合いに出しますが、それまでの「大人」の女性の意識が、どうやらその頃から変化していった様に思います。

個人的に、当時はまだ子供だったけれど、それでもあの頃の空気は、けっこうそれなりに実感しましたね。

とにかく、あの当時の女性、気が強い強い(笑)

とかく男性にチャホヤされる女性がわんさか増えて。

子供でもよく聞いたキーワードが、アッシー・メッシー。(死語)

バカな金持ちの男が、多額のカネを女性に貢ぎ、女性が労するどころか、女性の欲望にもカネが付く、ということを女性自身が知ってしまったという。

誤解を恐れずに云えば、それがバブル期の典型的な女性、といった感じです。

それ以降、女性の精神年齢はかなり幼児化したと思いますね。

ああ、男性ですか？

男性は元々幼稚な子供ですから。

だから女性まで子供になってしまった社会が、あの平成、「失われた20年」だったのではないかと、思います。

ちょっとでも日本の歴史を紐解けば。

ついぞ100年ほど前で、東北の農村の娘は、身売りされてしまうのが日常茶判事だったのに。貧困ということで云うならば、その100年前と今との経済的価値観が、また接近しているかもしれません。

さすがに身売りはないでしょう？けれど、違った形での女性の貧困問題が、また、今の日本に顕在化し始めている様です。

ある意味、身売りよりおぞましい状況が現出しているのかもしれません。

そういった世の中を生きていくに当たり、今の女性は、いつまでも「子供」であってはいけない

、と思うのですが。

## 人口減少・過疎化について

---

1990年代に、当時の経済企画庁が公表した『国民生活白書』で、はじめて少子化という言葉が使われたんだそう。

それから30年以上、日本の少子化の波は止まらない、とされていて。それにともない、次は高齢化社会の現出、果ては人口減少に突入している現在があるワケですね、日本は。

念のため、ちょっと調べてみようと思い、いくつかの参考本をかい摘まんでみたのですが・・・途中でアホらしくなってやめました(笑)

小難しく？どこかしらの怪しい統計を基に、結局出している結論は、要は経済的に厳しいからだ！というようなことを、長々と一冊の本にしてしまっている『少子化はとめられるか？編著・安部正浩』なんてのがあります。

日本のように、経済的に厳しいから、結婚しないし子供を作らない、結果、少子化・人口減少になる、というのであれば、実は問題でもなんでもなし、ごく自然な流れではないでしょうか。

なのに日本以外の、世界の人口は、これからもどんどん増加の一途という現状があるワケで。それを考えれば、日本一国の人口が世界のベクトルに反し、減少に向かうということは、とても建設的で貴重である、と思われるのです。

それを、なんで政府は、ヤレ問題だと囃し立てるのですかね？

一昔前の日本の言葉で、「貧乏人の子沢山」なるフレーズがあります。当時の、日本のいい大人が、自分達の現実の経済状況も把握せずに子供をせっせと作るワケですが。

よく考えれば、その行為は、そこら辺の犬猫と変わらない所業なんですね。もっとハッキリ云えば。そんな、自制を利かすことの出来ない行為は人間の所業ではない、要は人間じゃないんです(-\_-)

そういう意味では、現在、現時点で少子化に舵をきった日本の庶民は、非常に慎ましく、現実を弁えた？非常に人間らしい感覚を持っている、と云えるのではないのでしょうか。それなのに全世界の主流は、未だに貧乏人の子沢山という「野蛮」を、地でいっているのです。

それなのに、なんで政府は、ヤレ問題だと、少子化対策に乗り出すんですかね？

実は、理由は、二つほど。

- 1、GDP(国の通信簿)が、アメリカ・中国にますます突き放されることに勝手に焦り、その原因とされる(実は関係ない)少子化を食い止めればなんとかなるのではないかと思い込んだ。(ようするにバカ)
- 2、なんだかんだで血税を無駄に注ぎ込む場所をもっと増やしたかっただけ。(ようするにクズ)

しかし、少子化をあれだけ問題視しているのに、それ以上に輪をかけて保育所の対応が追い付かないというのは。

やっぱり、貧乏人の子沢山という国民性からは、未だ全日本人は脱皮しきれていないんでしょうか。

別にその辺の御たいそうな文献に依らずとも、保育所にしろ老人ホームにしろ、今、一番この日本で必要不可欠とされている施設で働く人たちに対する雇用形態および賃金は、他のどんな仕事よりも非常に劣悪、雀の涙にも及ばない。

そういう状況をいまだに放置してきたのは、この国のお家芸であります。

一国の首相が問題ない、とすれば、福島原発もしっかりコントロールされていることになるし、年金も、支払ってさえいれば、未来永劫、崩壊はしないことになるんです。

ついでに過疎化についても調べましたよ。

『縮小ニッポンの衝撃・NHKスペシャル取材班』では、北海道夕張市の現実を、個人的に初めて知りました。

ひとたび人口減少に陥ってしまったことによる、財源不足、それに伴うインフラの整備不備の発生、なのにそこに留まっている市民の深刻な税負担、なのにそこで働いている市職員の、超過労働にまったく見合わない、年収ベースで約四割削減なる給与。

そんなことでは、市の人口減少に拍車がかかる最中で、あらゆる地獄を凝視せざるおえないでしょう。

人口減少なら、市の職員を減らし財源もカットする、というような、余りにも短絡的な策を、国は呈しているのですが。

実際は、この夕張市のケースを見るだけで、いままでのような策は、まったく的を得ていないということが明らかです。

元々、夕張市の盛衰は、もう主流ではない炭鉱の採掘とその閉山にあるわけで、結果、人口減少(正確には人口流出)になってしまうこと、これは、日本全体でいうところの人口減少と同列に語るには極めて怪しい、と思います。

さらにいえば、人口減少に伴って発生した問題も、よくよく考えれば人災です。

その地域の経済が発展する・しないは、ハッキリいって予測できないこと、でも、そこで生きていく人たちのためのインフラが、そのこの経済の動向に左右されてしまうということでは、なんのために政府(政治家)があるのか、と思われてもしかたがありません。

というか、戦後、この国は、インフラだけをとってみても、それを維持発展させる仕組み・プランがまるでなかった、ということが、この夕張市のケースでもハッキリ露呈している、とワタクシ、思いました。

(まあ、皆さんも、うすうすわかっているとは思いますが)

個人単位では、経済状況が厳しいから結婚しない、という選択をしても、その人口減少に伴う負担？を個人に背負わせる、というのでは本末転倒です。

あらためて述べましょう。

もし、人口減少に伴ってなにか問題が起こるとすれば、それは私たちのせいではなく、先をまるで考えていない政府にあります。

だから最近、水道の民営化構想なるものが浮上したりするんです。

こういうときに、決まって麻生太郎が恥知らずなパフォーマンスを繰り出し、それだけで少なくとも私は死にたくなってきます(-\_-)

私も一応、日本国民なんですがね。

麻生さんはそんなに、ことあるごとに、国民を絶望のどん底に突き落としたいのでしょうか。

政府は、あらゆる政策を執り行う以前に、なによりもまず、自分のことしか考えないという野蛮な心根を、心底入れ換えることが急務です。

開き直ること無く、それをちゃんと考えていれば、そもそも政府がムダに問題視している少子化・高齢化・人口減少なるものも、実際、起きなかったかもしれないんですがねえ。

## 結婚イコール幸せ、なのか

---

そもそも論のそもそも。

結婚イコール幸せ、と、案外、日本人の大半は思っていることでしょう。

この私だって、子供の時は、大人になったら結婚はするものと思っていたし、恥ずかしなから？結婚願望は、けっこう最近まで持っていたと思います。

個人的に、一度結婚、そして離婚をした時に、結婚というものはゴール（もしくはスタート）ではなく、選択～別に結婚なんてしなくてもいいという選択があるんだ、ということに悟ることが出来たので、今、こうしてこんなことを書き連ねているのですが。

自身に置かれた現在の状況を鑑みて、結婚したいのか、したくないのか、を、じっくりと考えることは、無論、とても大切だと思います。

これをじっくり考えないと、大抵は無理をしようがしまいが、世間の偏見・風潮に流されて、もしくは勢いなどといい、ほとんどの人が、結婚という選択に、実は踏み切ると思います。

その時、なにが怖かって。

失敗だと思った時に、別れる羽目になります。

いや、簡単に別れることがちゃんと出来るのなら、それはそれで、まだ傷は浅く？経験値も得た上で、ある意味プラスです。

でも、別れたいと思った時に、もし既に子供がいたら。

その時の自身の経済状況はどうなのか。その他、細かい諸々のこと。

要は、結婚後の生活によって醸成された条件によっては、それが為に別れるという選択において、手遅れになるやもしれず。

ヘタすると、別れたいのに別れられない、という状態で、別れたいと思った伴侶と、一生を不本意に共にするという状況になるとしたら。

でも、そんな結婚でも、周りから見ると、それもその人の幸せの選択、なんです。

なんといっても、世間的には、その人は家族を持ち、もし病気もなく仕事も順調ならば、少なくともその家族の一構成員として、きっと、その選択をした長い人生を終えることでしょう。

いわゆる世間体、というものを意識して生きていく、というヤツです。

・・・少なくとも僕は、そんな人生は嫌です。

なぜかという、そんな不本意な人生を選ぶという芸当をやったのければ、きっと、とても大切なものを犠牲にするだろうからです。

それは、なんといっても、自分自身の成長、です。

その、自分自身の成長を止める、唯一の感情は、「あきらめ」です。

今、日本を含め、全世界の夫婦で、実はけっこうな割合で「あきらめ」た関係の夫婦が多いのではないかと思います。

別に何かの統計に寄ったワケではないので、その辺は、僕個人の実感で勝手な決めつけをしている、と思われて構わないのですが。

でもね、少なくともこの日本の場合、「あきらめ」た人が多いからこそ、戦後、多少の高度経済成長は出来ても、いつまでもアメリカの庇護という名の従属に甘んじ、民主主義とは名ばかりの不公平な格差社会がどんどん肥大し、マスコミはいつも大事な現実から目をそらし、国民は付和雷同でそれに乗っかる、そんなろくでもない社会が、結果、出来上がってしまっているのではないかと思います。

家庭環境が芳しくない、と、「あきらめ」と共に、周りに対しての思いやりを持つというような余裕もなく。

それで「あきらめ」た人は、自分のことしか考えられない、ということになります。

え？あきらめたから結婚しないんだって？

そうですね。

結婚したいのに、自身の容姿（ハッキリ云うことにしましょう）、経済状況、または相手に求めるハードルが高すぎる等で結婚できない、という人も「あきらめ」て、その選択を受け入れているのかもしれない。

いわゆる、おひとりさま、に甘んじる人生は不幸、と置いていらっしゃる。

はい、そういう人は不幸です。

そして、誤解を恐れずに云えば、そんな人が、もし、奇跡的に？結婚したとしても不幸です。

「あきらめ」という言葉は、ここでは、よく峻別(しゅんべつ)をしないといけません。

自分の容姿とか、持って生まれた性格とか、才能のあるなしとか、いわゆる、どうすることもできないものは諦めるしかないじゃないですか(笑)

そんなことよりも、自分の努力次第では変えられるものが沢山あるにもかかわらず、それを「あきらめ」る方が、自分自身の人生にとって、数倍の罪です。

それは結婚をしている、していないに拘わらず、です。

そして、そんな、元から「あきらめ」た人が、成り行き？である結婚によって、自分の成長しうる僅かな可能性をも塞ぎ止めてしまうのだとしたら。

そのことに無頓着であるなら。

自分にとって、何を積極的に？あきらめて、何をあきらめてはダメか。

つまり、自分にとっての幸せ、とは何か？

つまるところ、それは自分にしか解り得ないことでしょう。

だから自分でよく考えるしかないのです。

あらためて、結婚する同士というのは、最初に互いをどう見るのか。

論じるまでもなく、ほとんどは、相手に魅力を感じるころから始まるのではないのでしょうか。

つまり、元々独り身の時点で、人は、とても幸せでなければいけない。

そうでないのであれば、その人は、厳しい表現かも知れませんが・・・結婚する資格すらないとも云えるでしょう。

婚活に躍起になっていても、手段ばかり目の色を変えたところで、肝心のご自身の「資格」を整えていなければ、出会った相手が、下手をすれば、あなたのその心根を見抜き、あなた自身が、その相手に都合よく振り回されるような伴侶となってしまうかもしれません。

残念ながら、結婚を考える人間の中には、そんなクズも、案外、沢山いるのです。

でも、そういう状況になっても、周りは、世間は、「それ」を、あなたが選んだ幸せと思うことでしょう。

そうです、周りは、世間は、あなたが現在、本当に幸せかどうかなど、全く判断出来ないのです。

自分が幸せかどうかを正しく判断出来るのは、実は自分だけ。

これが解っていないうちは、たとえ自分の人生に何らかの出会いがあっても、結婚を考えること、ましてや簡単に結婚に踏み切る行動をとることはとても危険です。

繰り返しますが、一人でいる時点で、とても幸せであること。

特に女性は、周りの同年代が結婚に踏み切ったりすると、とても焦って目移りしやすくなるのではないのでしょうか。

(私、ガチガチの偏見で述べていますか？)

分からないでもない？のですが、でも、本当にそんな状態に陥ってしまうなら、それはとても不幸なことだと認識してもらいたい。

もう一度、繰り返します。

一人である時点で、とても幸せであること。

ここからでないと、結婚するかしないかの選択をする土俵にも立てないことでしょう。

## 子供を持つこと、親になること

---

結婚するということは、その大半の方が子供を持ちたい、と希望していることでしょう。逆に、結婚しないということは、子供を持つことも辞める(諦める)、ですかね、云わずもがな。

一方、子供というものは、結婚観、なるものについては、割りと幼少の頃から敏感に反応しているような気がします。

ワタシ、お父さんのお嫁さんになる、とか。

(そのうち、あんなクソじじいに、そんなこと言っていた自分がマジ信じらんない、となる)

子供の時から、つぶさに自分の親を見ていれば、おのずとその結婚観は独自の培われ方をしだし

場合によっては、結婚なんて、なんもいいことありゃしない、と、かなり小さいときから思うような子供も、稀に？いるかもしれません。

一応、今こうして生きているのは、親があつてのことである、と、そりゃ、皆そうです。

普通に(まあ、普通ってどういうことかと問われれば、またワタクシ脱線してしまうので、ここでは『普通』で押しきります)育てられて生活している分には、周りから親に感謝と言われてなんの違和感も感じないと思います。

現在、親になっている方の大半は、(まだ親になっていない方は、結婚して、親になったら想像出来ることとして)子供が出来て、子供を育て養うことは、別に大上段に構えることなく、当たり前のことであり、それなりに個々の教育方針はあれど、いずれ子供が病気もなく無事成人して、一人立ちしてくれれば御の字、というのが、だいたいの一般的な親の望み、と思われま

す。ということで、子供は、親へは自然と感謝の念を持つ、でも親は、子供に感謝は求めない。

ここがミソでして。

この、感謝の行き交いの、ある種の「バランス」が崩れると、親子の関係は、微妙に、あるいはとんでもなく崩れてしまうのです。

一例を具体的に云えば、親の側が、子供に、親への感謝(見返り)をダイレクトに要求する場合。

この間のラジオのコメンテータの一人がうっかり語りました。

「自分は、将来、子供に養ってもらうことを当てにしている。」

将来、ちゃんと子供に養ってもらえる保証はどこにもありません(笑)

万一、子供に養ってもらえなかったら、親への感謝が足りない！と自らワメくのでしょうか？

別に今に始まったことではないんでしょうが、ここにきて、また子供への虐待が取り沙汰されるようになってきました。

そんな、ろくでもない親に辛い目に逢わされたとして、子供は、この世に生まれてきたことに、どう感謝をするべきか。

ヘンな宗教によくある、そんな親の元に生まれたことは宿命とか因果とか、過去世がどうたらこうたら・・・

小難しく考え、そんなものを信じてはいけません。

だって、生まれる前とか、死んでどうなるかなんて、誰にもわかっていないのですから。

虐待する親は、言い訳として「しつけ」と言いますが、どうなんでしょうね。

「あんたなんて、生まれてこなければよかった」なんてセリフは、過去、三流ドラマによく見られましたが、今では放送禁止になるやもしれません。

要するに幼稚なのです。

子供を持つこと、親になることへのビジョンがあまりにも希薄、もしくはその覚悟が著しく足りないのです。

それは、その前段階の結婚についても、もちろん云えること。

そう、野蛮な人だけれど、案外、そういう人で結婚に踏み切る人は多数います。

でも、幸せ、という価値観からすれば、ハッキリいって、その人は結婚してはいけない人です。

と云いたいところですが。

人類の歴史は、ある意味「野蛮な人」が作る社会を基に、理不尽な差別、経済格差を産み出し。そういった、野蛮人の幸せ？は、その周りの人間達の不幸の上に作られ、それを土台にし、果ては戦争なども繰り返し、発展をしてきた現実があります。

でも、これからは違います。

世間は、世の中は、伝統とか遺伝とか、無責任なことを放言しますが、これからの自分たちは、そういったことに惑わされず、そういった親の呪縛を絶ちきればいい。

大多数のまともな？親にとって、自分の子供に対しての感情で、万が一にでも「親不孝」なる言

葉は、実はありません。ないんです。

本当に、極々稀でしょうが、子供に見返りをあからさまに求めるような野蛮な親に対しては。そんな親には、いっさい感謝しない、という選択肢もありえます。もちろん自分が存在する以上、自分の親を完全否定は出来ません。

でも、親子の縁を絶ちきるぐらいの勢い・覚悟がなければ、その野蛮な遺伝子を絶ちきることは出来ないのです。

そして、それは、生物の進化を促す上でも必要不可欠なこと、だったりするかもしれません。

進化の過程では、あのヘビだって自分達の一形態だったのですから。

ヘビのような親が、「この親不孝もの！」と言ってしまったら、その親はおしまいです(笑)

まあ、いずれにしても、親になるって、大変です(\*\_\*;

## 一人で生きていくことに対する、世間の目

---

ソロ(結婚しない)で生きるには、自分を愛すること。『超ソロ社会・荒川和久著』

この荒川さん(生涯未婚として生きていく、という方だそうで)は、ワタクシ的には一読して、未婚、既婚者に対してのイメージが、少々雑に感じるものの、結婚しないという選択をすることに関しての指南本としては、比較的共感する内容でした。

そもそも一時期、こういった独身者向け?に書かれたと思われる本やメッセージが溢れるようになった昨今、もう時代は結婚しないという選択が、ネガティブではなくなってきつつある、のかもしれない。

荒川さんのように、かなり意思が強固で結婚しないという人ばかりであれば、問題はないんですが。

でも、だいたいの日本人全般は、そんなに意思の強いものではありません。

人は、親から生まれてこの世に存在するようになった時から、ある意味、どう生きようが自由である、それは真実です。

それなのに、まず親の無意味な偏見で、こうしなさいあしなさいと云われ。

そのうち学校の先生、友達、仕事をするようになったら職場の上司、同僚、SNS・・・いわゆる世間の目にダイレクトにご自身がさらされれば、いわゆる自分を愛する余裕などはなくなってしまい。

自分の面の皮がよほど厚くなければ、というか、元々幼少から「自信」というものを育むことが出来なかった人は、世間に、自分の意思を押し通すことなど不可能に近いかもしれません。

まあ、世の常、というのであれば、世間なんて場所は、個人を束縛こそすれ、個人に「自信」など、植え付けたりはしないものです。

一時、「自分探し」というものが流行ったと、荒川さんの本にかかっている項目については、つい笑ってしまいました。

さて、「自分探し」をしなければいけないぐらい、世間から虚勢されまくった自分という存在。だからといって、いままでの自分の生活とは関係ないインド?なんかに行ったところで・・・まあ確かに、カースト制度の成り立ちやら、昔の細野晴臣氏が向こうの乞食を見て衝撃を受ける等、ご自身が今までに感じたことのないカルチャー・ショック(死語?)を受けるかもしれません、が。

「自分探し」を、とりあえず肯定的に捉えるなら。

おそらくは、今の、何かに不満を持つ自分が、心底納得しうる本当の？自分に変わる、ということと同義語なんでしょう。

であるなら、手っ取り早く？自分がいる今の場所で戦うしかありませんよ。

「戦う」という言い方に、少しでも語弊があるのなら。

冷静に、自分とその現在の状況を分析し、学ぶしかありません。

学ぶためには、まず、謙虚でないと。

謙虚とは、人生の要所々々で、いつも負け続けている自分を、素直に認めるところから生まれます。

これがない人は悲惨です。

負け続けていることを素直に認められない人は、性格がどんどん傲慢になり、偏見の塊で人を見下し、やがては思考停止に陥ります。

そんな状態で「自分探し」をしたところで、ゆくゆくは麻生太郎みたいな人になります(笑)

あと、最近では後期高齢？者に突入した人が、終活なるものにいそしみ、せっせとお寺巡りをしているとか。

ハッキリ云ってク○ですね。

そういう輩は、いままで若い時からちっとも学ばなかったんでしょうね。

そういう、これから未来のある若人のためになるようなことには一切関知せず、最初から最後まで自分のことしか考えていないご老人は、終活などと気取らずにさっさとくたばってしまった方が社会の為です。

お遍路に繰り出している菅直人のことを云ってます(笑)

まあ、世間の目というものは、かつての世間の目に流された、そういう、ロクでもない人たちが大半なので。

とにかく、一人で生きるにせよなんにせよ、世間の目としっかり戦っていったところに真の価値があるというものです。

ほとんどこちらの偏見で述べてしまいました、すいません(苦笑)

## 自立(特に女性)について

---

最初に、日本のここ数十年の経済事情？なるものについて、ツラツラと書かせてもらいました。本当であれば、この日本に限って云えば、なんですが。

戦後の経済成長から見事な復興を遂げた時点で、この国の政治家連中が、もっと諸外国との経済上のバランスをとり、その上で国内の舵取りをうまく切っていれば、もっと成熟した国になっていたかもしれません。

こんな「小さな国」だけれども、GDPだけをとってみても、アメリカや中国に次ぐ経済大国なんです。

おそらく、人間としての、知恵の出し方がハンパない、のだと思います。

もっと遡ること数百年前、日本が江戸と呼ばれていた時代。

この国の文化的洗練度(なんといっても、当時の識字率は庶民レベルでもベラ棒に高い)は、南蛮渡来の西洋人も驚嘆し、一目起きました。

かつては、あのロシアや清(中国)を戦争で打ち負かした史実もあるわけで。

(ここで戦争なんてドウたらコウたら、というような突っ込みは、よしてください)

この日本という国は、どこの時代をどう無造作に切り取っても、他の国にはない独自の文化、発展を遂げてきた、という歴史を、結構、観て取ることが出来るのではないのでしょうか。

それが、あの第二次世界対戦に負けてからは、ある意味、日本は、いままでの日本とは違う、特殊な国となっています。

軍事的には、あのアメリカに守られている形をとり？それはいたしかたないとして。

考え方としても、だんだん西洋思考、すなわち資本主義・民主主義、なるものを押し付けられるようになって。

民主主義なる言葉、聞こえはいいのですが。

民主主義、さらにはフェアとか、そういった言葉は、そもそもアメリカにとってのモノであって、日本のモノではない。

だから自民党をはじめとする、いままでの政権政党は、はじめから日本のモノと錯覚した民主主義を標榜する形で、この国を運営するに至ったのです。

だいたい、ここ数年の主だった選挙をみても、その投票率は、まだまだ全国民の過半数であるということ自体、実はこの国で云われるところの、まやかしの「民主主義」が、全く根付いていない証拠ではないのでしょうか。

その根付かない民主主義の名で政権を握る人たちは、今後もいっそう、アメリカの云うがままの政策を押し通すばかりになって当然です。

そしてそういったことが、この国の個々人を、いっそう、自立しにくくしている原因でもあるワケです。

西洋人の考えは、一見、合理的・先進的なように見えて、未だに野蛮です。

まあ、別にワタクシ、政治家ではありませんので、この日本国の理想について、あまり、語るに落ちるようなことは云いません(-\_-)

でも、とにかく、戦後社会のこの難しい現実を、それでもしっかり把握することは、イチ日本人として、これからもこの国で生きていく上で、必要なことだとは思いますが。

ここで男のワタクシが一番語るのが難しい「女性」について。

今、ハタ目からみても、女性が一人で生きるリスクは相当のものがあると思われまます。

最近の貧困女性に焦点を当てた、某雑誌を拝見しましたが、只々悲惨です。

いわゆる母子家庭でなんとか子供は育て上げたけれども、子供が成人して出ていった後は、相変わらずの低賃金、さらに歳をとるにつれ、どんどん生活はままならず。

もうどうしようもなくなり、なすすべもなくとうとう自殺に踏み切ったところ「寸で」のところ  
で近隣住民に助けられ。

そして、役所に行かれることをすすめられ、以降、生活保護に頼っている、とのことで。

生活保護に頼ることすら思い付かない人が、未だ沢山いるのは衝撃です。

いや、色々と人様に頼ることを後ろめたく思うならば、知識がないだけでどんどん追い詰められた方向に向かわざる負えなくなり。

先ほどの項目でも散々述べましたが、今のこのご時世、男だって一人で生きていくのがやっとな時代、いわんや女性が一人で生きるとするならば、大半の方が絶望的な状況に見舞われることは必至です。

結婚しない女性、もしくはシングルマザーの労働・生活環境というものは、皆さんが、大体想像している以上のことが、そのまま現実として当たっていることばかりといって差し支えないでしょう。

もともと日本女性の労働の歴史は、他の国とはまた違った側面があった様です。

いわゆる「女工哀史」は置いておいて。

戦前戦中は、兵隊にとられる男の後がまに、女子の労務動員計画が遂行され、さらに戦時局面が深刻になるにつれ、女子勤労働員は軍事工場などの挺身隊、いわゆるブルーカラー労働にまで

拡大。(趣旨『働く女子の運命・濱口桂一郎著』)

戦時下の日本国内は、女性の労働力でもって国を支えることにより、文字通り国家総動員で戦局に備えた、ということだったそうで。

その当時の女子労務動員だった市川房枝氏や村岡花子氏が、後の婦人参政権運動の急先鋒として活躍し、そういった活動の延長が、その後の男女雇用機会均等法等、現在の女性の社会的地位向上に大いに貢献した・・・と云いたいところなのですが。

この、戦後日本における、女性の社会的立場というものは。

本当に、本当のところはどうなのでしょう。

## 新しい？結婚観と、幸せの、カタチ

---

さて、いままで、いろいろ道草しながら述べていくにつれ。

だんだん、暗澹たる気持ち？に突き落としてしまっているようであれば、申し訳ありません(-\_-)

要は今の日本、結婚しようがしまいが、人として生活する・生きていくこと自体がけっこう厳しい、と感じられている方が、無論ワタクシも含め、沢山いるワケです。

そして、この問題をすぐさま解決する糸口も、未だ見当たりません。

それを云ってはオシマイ、ではあります。

別に自分が云わなくても、皆それぞれが考えてもらうことが前提で、最後の項目に突入です。

そういえば。

最近はその山里亮太氏と蒼井優さんが結婚、芸能界としては久々に微笑ましい話題を振り撒いたことと思います。

同じように？誰からも祝福されるような結婚は、現在だって一杯あると思います。

そして、そういった、愛のカタチは、時にはつまづきながら、仲むつまじく、少しずつ育んでいく。。。 (う～ん、こんな台詞は口が笑うなあ)

さあ、ここからが本題中の本題。

せっかく結婚した方々の、残念な破局・離婚原因。

その一番は「不倫」というじゃ、ありませんか。

こんな状況を鑑み、最近、ふとワタクシなりに一つの考えを記してみたいと思ったことが、今回の、この「結婚なんて、やめなさい」なんです。

なにかというと。

一夫一婦制に、こだわらない生き方。

いまさらなんですけど、一夫一婦とか一夫多妻とか、で、誰それと議論を戦わせる気はまったくありません。

日本人のほとんどが一夫一婦制を断固保持？するというなら、それはそれで構いません。

でも、他人にまで一夫一婦制を貫かせるというのは、それがたとえ自分の子供だろうが親戚だろうが、余計なお世話、ということにしていきたい。

さらに付け加えるなら、いらぬ偏見さえ抱かないでいただきたい。

要するに。

今のこの日本に、一夫一婦制はもちろん、一夫多妻(一婦多夫)もきちんと認め、(ついでに生涯独身も)市民権を持たせる、ということです。

云わずと知れているかも、ですが、かつてこの日本、明治期以前は一夫多妻もチラホラいた、ということですし。

現在だって、アフリカ諸国等では、いまだにある一夫多妻制。

実は学術的に、一夫一婦制は人類に向かない、という研究？もある様なんですけど、ここではそういったものは、あえて一切関知しないこととします。

とにかく一夫一婦制にこだわらない、を語るにあたって。

以前、テレビ番組で、一夫二婦家族のドキュメンタリーをやっていました。  
(もちろん日本国内の話)

それを観て、個人的に思ったことは一つ。

相手の立場に立って、お互い、相手を気遣うことがきちんと出来ていれば、たとえ、自分の愛する人が他の人と愛し合っているても大丈夫、という衝撃的な事実です(笑)

冷静に考えてみれば、というか、考えようによっては画期的？な自由恋愛だと思いました。

一人の異性だけではなく、同時に他の異性(もちろん同性も)とも同時に付き合える、ということは、自身の人生の成長にとって、とてもかけがえのないことではないかと。

おいおい、単にフシダラな乱交？を認めるのか、と要らぬ偏見で先走らないでいただきたいのですが。

自分の成長のため、とはいえ、すでに自分と恋仲になった人を蔑ろにするようなことがあっては

いけません。

繰り返しますが、好きになった以上、相手を気遣わなければいけません。

(芸のためなら不倫も厭わないという男を許す、あの都はるみは、実は相手から気遣われない、単に都合のいい女、ということです)

たとえば。

好きな人が出来た時『僕は(私は)一人だけと付き合うなんて出来ない、他の人を好きになることもある、それでもいい?』と聞く(笑)

妻子持ちの人が不倫する時、『僕は妻子持ちだけど、それでもいい?』と聞く。

・・・ああ、妻子持ちの場合、その奥さんが旦那さんの不倫を容認している場合、そして、上記のことをキチンと不倫相手に事前説明することが出来、そして相手もそれを了承するならば、それはもう不倫ではありません(^^)

そして、これが一番大事なことです。

沢山の異性と付き合っている、その男(女)は、付き合っている異性全員を、悲しませない、ということ。

(その具体的なことについては、各々で考えるしかないと思いますが-\_-;)

ちなみに先のテレビでの一夫二婦(それぞれに子供もいる)での共同生活を営んでいる家族は、役所へは、それぞれ結婚～離婚という手続きを経て、現在、事実婚というカタチでいるそうです。そうです、結婚というものを放棄?することでなければ、こういった幸せのカタチを築けないという事実があるのです。

そして、それを実現するためには、その人が相当、成熟?した人格を持ち合わせていなければ成立しない、ということです。

そんなこと、いきなり云われても、ですか?

自分が好きになった相手が、自分のことを好いてくれていると同時に、自分とは違う人も好きでいる、という状況には、どうしても耐えられない、という人。

(実際はそういう人ばかりなのかな)

そんな人は、自分だけを好いてくれる人?をちゃんと見つけてもらった上で、よく聞いてもらいたい話があります。

自分だけを愛して!ということは、結局、相手を縛ることでもあります。

もちろん、それが悪いとは云いません、でも。

たとえ相思相愛であっても、その好きな相手の気持ちって、本当にあなたは解っているでしょうか。

映画『ゴーン・ガール』を観ればきっと解ります（笑）

あなたが好きになった相手は、きっと何かしらの魅力があることでしょう。

その魅力ある方は、当然、たくさんの人をも魅了するのだから、結果、他の人と不倫関係になるやも知れず。

もし、そんな方を好きになってしまったあなたは、絶えず寂しさと孤独に苛まされてしまう？ということでしょうか。

でもしょうがないですね、そんな人を好きになってしまったのだから。

では、そんなあなたは、どうしたらいいのか。

その耐え難い？気持ちに打ち勝つためには、自分も「魅力」ある人間になるしかないのではないのでしょうか。

まあ、「魅力」のある人間になるって、そんなこと、僕にもよく解らないのですが(-\_-;)

でも、人を好きになったことがあるならば、その衝動の中に手掛かりはある、かもしれません。

とにかく、それぞれ、魅力ある生き方を模索していく中で、新たな出会いを経験し、成長していく。

そして、なにか、手堅いものを身に着けることが出来れば。

自分の愛する人を尊重し、緊張感を持って謙虚でいられ、そして的確？なものを絶えず与えることが出来るのならば。

うーん、やっぱり一人だけを愛するなんて、もったいない（笑）

今の芸能界を始めとする、いわゆる不倫問題は。

実は「不倫」が問題ではなく、不倫を行う人々の未熟さが問題である、と思っているのですがいかがでしょうか。

あのベッキーは、いまでこそ自虐キャラ？を得ているようで安堵しておりますが、文春砲に射められた当時は、その対応の幼稚さに、目も当てられなかったような感じが致しました。

同じ「不倫」でも。

その関係が、とても大人で成熟した人が行うことと、未熟で幼稚な人間がやっていることが一緒クタにされることで、いつまでたっても石田純一の『不倫は文化』なる名言が市民権を得ないの

であります。

そもそもの一夫一婦制は、元々、キリスト教の風習から培い、育まれてきた説？もあり・・・ハッキリいって、知らんけど。

それよりもなによりも、ワタクシ個人の場合は、あの「ガラスの仮面」を究極の愛とってしまったのがいけない(^\_^;)

おそらくそのカタチが瓦解してしまったが為に、あの「ガラスの仮面」、未完の大作と呼ばれてしまう可能性が出てきてしまいました。

とにかくにも、ここは日本です。

とりあえず、むやみに不倫を推奨することはしません(~\_~)

今の日本が抱えている、経済やら教育やら、とにかく生きる、ということに関しての深刻な問題の突破口を考えるならば。

ご自身の人生、より多くの男性、女性と関わることこそが、今抱えている問題、そして将来の不安、それらが例え解決の方向に迎えなかったとしても。

少なくとも自身の気持ちの中にある絶望の二字を消し、行動と知恵を切開くカンフル剤になるやもしれないのです。

もちろん現実、なかなかうまくいかないでしょう。

現実、なかなか良い人と巡り合わない。

さらには、自分の成長に足枷をかましてくるような人を、まかり間違っって？好きになってしまったり。

そんな人と、いつまでも一緒にいるつもりですか？

そんな人と一緒にいるぐらいなら、一人で自分の幸せを追い求める方がいい？違う？

そういった、選択をする勇気を持つ。

そのためには、自分にも相当の覚悟や、物事を見極める力が必要で。

だから「結婚なんて、やめなさい」なんです。

この「結婚なんて、やめなさい」という言葉には、結婚を始めとする既存の「ならわし」に振り回されることなく、ご自身の幸せと成長を、ただただ追い求める、とにかくそれを一人一人が真剣に考えてもらいたい、という気持ちを込めているつもりなんです。

それこそが、本当に自分が出会いたい人と出会う近道となり、さらにはまた、この暗澹たる現実

しかない日本に、あらためて希望を育む一歩になることと、僕は信じます。

ですから。

どうぞ、あなたが、幸せになりますように。

## あとがき 《参考文献について、物申す》

---

ふ〜っ、(^\_^;)この「結婚なんて、やめなさい」の執筆は、単なる個人的な悪趣味？の範疇であるとはいえ。

とにかく自分の中にある、なんともいかんともしがたい、鬱屈したかたまり？を、なんとか吐き出せた、という感じで、今、奇妙な安堵にひたっております。

そして、そんな、悪趣味の範疇なるものを、もし最後まで読んでいただけたとしたら、あなたの、その崇高なるモノ好きさ加減(失礼)に、ただただ、感謝の念を抱く次第です(〜)

そして今回、こんなものを書くに当たり、それなりにと思う参考文献を、いろいろ買い漁りまして。

でも、それなりに参考になるかなと思ってはみたものの、そのほとんどがあまり参考になりませんでした。

(とりあえず、多少、参考にした本については、既に各項目で、その書籍名や著者等を載せています。あらためて見ていただけたら幸いです)

で、これから述べる書籍は、まったく参考にしなかった。

でも、そんな書籍を読むことで、結婚というものの価値観が、こちらにとって、ちょっと違った感じで、あらためて浮き彫りになったり、反面教師？になったりもしましたので。

ということで、いわゆるAmazon評とはひと味違う？ワタクシの感想を記しておきたいと思います。

『世界一孤独な日本のオジサン・岡本純子』VS『極上の孤独、夫婦という他人・下重暁子』

このオバサン方をVSとしたのは。

岡本さんは、孤独って害悪以外のナニものでもない、といった主張であるのに対し、下重さんは、孤独をすばらしい、楽しむもの、というスタンスで執筆していること、なんです。

でも。

ハッキリいって、このお二方とも、書いてあることで共通しているのは、単なるステレオタイプな物言いではない、ということなんです。

あと、岡本さんは偏見が病的。顔が嫌い(笑)

下重さんは、いままで誰かが主張してきた内容を、ただなぞっているだけのような感じ。

下重さんの場合、この方は女子アナの走りみたいな人だから、エッセイ的な読み物として読めば

、それなりに需要としてはあるのかもしれないが。

まあ、あえてキツイ言い方をさせてもらえば、わざわざ本にしなくてもいい内容でしたね。  
ということで、せっかくVSにしてみたけれど、両方ともガッカリです。

### 『婚活時代、家族難民、結婚クライシス・山田昌弘』

この山田さん、いわゆる「婚活」という言葉を広めた方だそうで。

本職は、家族社会学を専門とする大学教授なんだと。

で、きっと、そのテの情報が、この方にはいろいろ入ってくるんだと思われま

いろいろ読ませてもらって。

確かに、問題定義として、パラサイト・シングルだの中流転落不安だの、社会保障の現状だの、  
多岐にわたってそれぞれの項目についてそれなりに？述べることはするのですが。

つまるところ、非常にもどかしいのが、この山田先生、問題定義をいろいろしておいて、それ  
に対しての解決策など、なにも考えることはしないし、なにも示さないのです。

問題定義をしたらしたで、しっぱなし。

要は他人事なんです。

婚活とかパラサイト・シングルとか、そういったキーワードを流行らすパフォーマンスには長け  
ているものの、肝心の大学教授としての本分(おそらくソレって、問題に対する対策や解決の糸口  
たる研究でしょう)を、全くおろそかにしているのではないのでしょうか。

ハッキリ云って、テレビのコメンテータとして小銭稼ぎをするレベルの人です、残念。

### 『結婚の嘘・柴門ふみ』

はい、あの一世を風靡した「東京ラブストーリー」の漫画家さんです。

個人的にむかし、この方の漫画を読んで泣きました。当時はワタクシ、ウブだったんですね(~~)  
でも、この本は、彼女の夫で同じ漫画家の弘兼憲史氏との、ある意味、特殊？な結婚生活を元  
に、あらゆる経験をしていく中で培った、彼女の悟りの境地？の履歴の数々、といった印象で、ま  
ったく参考になりませんでした(笑)

というか、そのライトな語り口は、面白かったけど、ちょっと物足りなかったかな。

最後に『結婚・末井昭』

この末井氏は、仕事はイラストレーターということ以外、ちょっと謎で。

おそらく、サブカル界隈の人脈があるようで、でないといこんな本は出せないのでは。

それから世代的には自分の20歳上、戦後間もないくらいの生まれの人だから、現在はもう人生のリタイアの息、といった感じだけれど。

僕は、この人ぐらいの世代の人達に、いろいろ文化的？な影響を受けることが多かったので、そんな立ち位置で、最初は読み始めたのだけれども。

一言で云うと、この人は、クズ中のクズですね。

元々、幼少時代に、ここで云うのも憚れてしまうぐらいの、両親共にクズであったことは、ただただ傷ましい、とは思っただけけれど。

でも、その子供時代の虐熱に、あまりにも炙られまくったからだろうか、その業から全く絶ちきれないままに大人になって。

ギャンブルに溺れ、金にはルーズで、社会性が全く伴ってはず、女性にはすぐ手を挙げる、それでいて気が弱く、いつも自分のことしか考えられない。

ということで、関わる女性を、ことごとく不幸にしていく。

その一代半世記、といった趣で、ワタクシとはまた違った意味で、この本、悪趣味です(-\_-)

まあ、そんな人間に、なぜ、女性が惹かれていくのか、といった点もまた謎で、至極興味深いことではあります。

巻末は、あの高橋源一郎さんと対談、半世紀の人生をも全く成長のないまま、赤裸々にのほほんとして語り合っています。

あそこら辺の世代の人達にとっては、一つの生き方のけじめ、のような感覚で、自叙伝のようなものを出したのかもしれないけれど、これから生きていく人達にとっては、単にこの暗澹たる日本の流れに翻弄されまくってしまったクズ人生の記録、というだけのことで、ちょっと哀れにも感じてしまう、なんともやるせない内容でした。

以上、参考にしきれなかった文献たち、でした。

Amazon評に書いておいた方が、よかったですかね(^\_^)



結婚なんて、やめなさい

<http://p.booklog.jp/book/128079>

著者 : hirofumi

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirofumifumi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/128079>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト